

〈論文〉

唐澤博物館の存在意義と可能性

森田喜久男

要約

小稿は、教育学者唐澤富太郎の私設博物館である唐澤博物館の存在意義と可能性について検討を加えたものである。

まず唐澤博物館のコレクションについて検討を加え、その収集範囲が、従来の教育博物館のように学校教育に偏重するものではなく、生活教育史を出発点として、さまざまな分野からのアプローチを可能とするものであったことを確認した。唐澤自身の資料収集の方針は、ポピュラーなものを大量に収集した点にある。その結果、地域への浸透変化や時系列的变化を追うことが可能となる。

唐澤は、明治から大正にかけて存在した教育博物館を目標としながらも、更にその可能性を広げたものと評価できる。唐澤博物館のコレクションは、単なる教育史研究の資料にとどまらず、日本人形成史研究の重要な資料になり得る。

キーワード

生活教育史 教育博物館 雑然のもたらす実証性 視聴触覚教育 開かれた教育史

はじめに

1993年に開館した唐澤博物館は、東京教育大学名誉教授の唐澤富太郎が独力で収集した資料7,000点余りを展示する私設の教育博物館である。その屈指のコレクションは、海外にも知られており、フランスの国立教育博物館長夫妻や韓国の教育庁などから視察に来ることもあったという⁽¹⁾。

このように特色ある博物館であるにも関わらず、この博物館の存在意義について、教育学の観点からも博物館学の観点からも十分な検討がなされていない。そこで、小稿では唐澤博物館におけるコレクションの特徴を確認し、唐澤富太郎がどのような問題意識を持って資料収集にあたったか、この点について検討を加え、その上で、唐澤博物館の可能性について考察する。

I 唐澤博物館におけるコレクションの特徴

唐澤博物館におけるコレクションの特徴は、まさに展示室に具現化されている。そこでまず展示室に

平成29年9月30日受付 平成29年12月12日受理
もりた きくお：淑徳大学 人文学部 教授

どのような資料が並べられているか、この点について確認するところから始めよう。

1階展示室には、学校の歴史に関わるものが展示されている。「学校がはじまったころ」のコーナーには、壁側に掛図、ガラス板などが展示され、一斉教授法について解説がなされている。通路をはさんで反対側には楽器や幻燈器、黒板、算盤、顕微鏡、水圧実験器、2人用机、椅子などが配置されている。

次に「知識を世界にもとめて」のコーナーには、教科書、通知簿、卒業証書、賞状、二宮金次郎像などが展示されている。

さらに「明治天皇と教育勅語」のコーナーには、教育勅語、教育勅語図解ガラス絵、教育勅語図解、幼学綱要、御真影奉安殿、御真影用唐櫃、御真影非常持ち出し用背囊など教育勅語一式が並ぶ。

1階から2階へと向かう階段の手すりは鳥取県倉吉市の成徳学校で使用されていたものを再利用し、階段壁には「国定教科書販売所」の看板などが貼られている。

2階展示室には、子どもの遊びに関わるものが展示されている。同時に近代以前の教育に関わる展示もある。

具体的には、男の子のおもちゃ、女の子のおもちゃ、天神様、往来物、寺子屋、紙芝居に関わるもの、おとぎの世界、「人形にみる子どもの生活」、水滴・文鎮・硯などの文房具、算盤などである。

2階展示室と3階展示室との間の階段の手すりは、東京盲学校で使用されていた唐草模様の手すりを再利用したものである。



写真1 1階展示室



写真2 教育勅語関係展示



写真3 2階展示室



写真4 3階展示室

3階展示室では、生活史に関わる展示を行っている。具体的には、女性の装身具、男性の粹と旅道具、商人や職人の道具、江戸時代の行灯から明治時代のガス灯までの明かり、農耕用具、食の器と道具、さらに竜吐水までである。

このような形で展示室に並べられている資料からどのようなコレクションの特徴が浮かび上がってくるのであろうか。

まず、唐澤博物館のコレクションは、大別して3つの大きなテーマに区分することができる。それは、「学校の歴史」「子どもの歴史」「生活の歴史」の3つである。

次に指摘できることは、それぞれのテーマに属する小さなテーマに関して、ありとあらゆる資料が収集されているということである。

たとえば、教育勅語を事例に挙げると、教育勅語そのものだけではなく、教育勅語図解ガラス絵、教育勅語図解、幼学綱要、御真影奉安殿、御真影用の唐櫃、御真影非常持ち出し用の背囊まで収集され展示されている。

そのことにより、一つ一つの小さな項目、それ自体で独立したストーリーを描くことが可能となる。

唐澤博物館では、細部にわたってストーリーを組み立てることをしなくても、来館者がそれぞれの興味関心に応じているような発見ができる。独自の歴史像を構築することも可能である。

なぜならば、個々のモノがどのような形で使われたか、そのことについて詳しい解説パネルを用意しなくても、モノそれ自体で語るができるようになってきているからである。つまり、来館者どうして、展示品を前にして対話ができる。

このような事例は、歴史系博物館におけるコレクションの重要性について改めて再認識を迫っていると言える。今日、博物館における資料の収集活動については、必ずしも潤沢な予算が確保されているわけではないが、質量共に充実したコレクションがなければ、本当の意味で広がりのある展示を行うことができないということなのである。

それでは、唐澤富太郎はどのような方針で資料収集を行ったのであろうか。次にこの点について検討を加えたい。

II 唐澤富太郎の資料収集

ここで確認しておくべきことは、唐澤は実物資料にもとづく教育史の構築を目指していたという事実である⁽²⁾。

そして、唐澤の教育史研究の柱の一つに仏教研究があることも重要な意味を持つ。仏教研究において、唐澤は追体験的な理解をしようと努力したという。

そのために唐澤は、永平寺に参籠したり、日蓮研究の前提として佐渡妙照寺における日蓮遺文を閲覧したり、阿仏房を訪問した。また、山梨県の身延山や静岡県伊東の遺跡も訪問している。さらに法華経を書写し、諸寺へ奉納もしている。奈良女子高等師範学校在職中には積極的に奈良の古寺を訪問し、仏像の鑑賞と行法の見学に努め、高僧との対話も行った。

実物への目覚めとして唐澤自身が述懐しているのは、佐渡において日蓮の肉筆に接した感動したことと、欧米16ヶ国を歴訪した折に、教育資料が残されていたことに刺激を受けたことによるという⁽³⁾。

では唐澤自身の資料収集の方針はどのようなものであったのか。教育史の観点によるところは言うまでもないが、特筆すべきは、ポピュラーなものを集めたことである。しかも、それらを大量に収集した点が大きな特徴である。大量に集めることで、地域への浸透変化や時系列的变化を追うことが可能となる。

また大量に収集することによって、当初は予想もしなかった発見が生まれることがある。たとえば、小学校の賞状を明治から昭和にかけて大量に集めていくことにより、明治期の賞状には必ず賞品がつくこと、昭和期に入ると賞品が消えて賞状だけが氾濫する傾向にあることなどを唐澤は指摘する。このように大量に資料を収集することで浮かび上がってくる現象を唐澤は「雑然のもたらす実証性」という言葉で表現している。「その雑然にも自ら秩序というものがある」とも述べている⁽⁴⁾。

唐澤の目指す教育史は、従来の教育史の領域をはるかに超えるものであった。1953年に誠文堂から刊行された『日本教育史』において、唐澤は「新しいタイプの教育史」が打ち出されるべきであることを主張し、今後開拓されるべき研究方法と領域について以下のような形で列挙している⁽⁵⁾。

- ① 生活教育史
- ② 慣習、習俗の重視
- ③ 文芸作品の利用
- ④ 教育実態の研究
- ⑤ 地方教育史
- ⑥ 伝記
- ⑦ 問題史による通史
- ⑧ 社会史的背景からの思想史的研究
- ⑨ 世界史的立場
- ⑩ 実物を通しての近代教育史の開拓

上記の研究方法与領域を開拓しようとするならば、今まで教育史の分野では「資料」として認められていなかったものを「資料」として発掘しなければならなかったことが明らかになる。

このような形で徹底した資料収集を行いながら唐澤が目指していたことは、「日本教育史学の相対的独立性」の獲得であった。

唐澤はこの点について以下のように述べている⁽⁶⁾。

- ① 『教科書の歴史』などの研究を通して強調したいと思ったことは、日本教育史は日本教育史として他の学問に対して相対的な独立性を保たなければならないということである。
- ② というのは戦後の教育史研究を見ると、とかく政治史や経済史の枠にはめこんで、教育の現象をただその面からのみ把握しようとする行き方がとられがちであると思われるからである。
- ③ このような行き方では日本教育史は政治史や経済史に依存し、教育史学の独立性は保たれないのである。
- ④ ところが私はこの研究によって日本教育史学の相対的独立性を勝ち得たものとする次第である。
- ⑤ というのは、この教科書の変遷という明確な時代区分が、多くの思想史的研究に対して影響力を与える点が多かったからである。
- ⑥ たとえば武田清子さんの日本人の思想調査は、この私の教科書の時期区分によってやられていることを、何時かその研究物をいただいて知ったことなどがその一例である。
- ⑦ 日本教育史は政治史や経済史の研究成果を受け入れなければならないが、逆にまた教育史の研究成果が政治史や経済史の研究に対して貢献してこそ、はじめて学問の相対的独立性が保たれると考えるのである。

このような形で進められた唐澤の資料収集は、教育史を文献偏重、制度史偏重の状態から解放した。その上で、教育史の新たな可能性を提示したのである。それは「閉じた教育史」から他分野へ越境する「開かれた教育史」への試みであった。

Ⅲ 教育博物館としての唐澤博物館

このような観点で収集された資料をもとに成立した唐澤博物館は、狭い意味での教育史に特化した教育博物館とは次元を異にする博物館であることが判明する。

では、唐澤自身は、既存の教育博物館の存在を全く無視して自分自身の信念のみにもとづき資料収集に邁進したのであろうか。

ここで注意すべきは、唐澤がその論考、「東京教育博物館について」⁽⁷⁾ や『『教育博物館』の課題と意義』⁽⁸⁾ において東京教育博物館について言及していることである。

ここでは、後者の論考、すなわち『『教育博物館』の課題と意義』の中から該当箇所を引用する。

- ① いったい現在日本には、各種の博物館が数多くあるにもかかわらず、何故教育に関する博物館が無いのであろうか。このことは極めて残念なことであるといわなければならない。そこでここに改めて、かつて日本にはすばらしい教育博物館があったということについて、まず注意を喚起したいと思うのである……。
- ② わが国の教育博物館は、物産局仮役所が物品を収集し、これを明治4年にできた文部省の中に博物局をおいたことに始まっている。そしてその後いくたの変遷を遂げているのである。
- ③ すなわち明治8年3月には旧昌平黌の中に移され、大成殿を仮りの博物館としたが、その翌4月、東京博物館と改称、さらに明治10年1月教育博物館と改称し、同年3月に文部省から上野公園地内に新設の建物と地所とを交付され、同年8月に本館参観規則や本館書籍縦覧規則などの編成ができ、後の東京美術学校校舎となった場所に一般公衆の来観を許したのである。
- ④ ここでは多くの教育品を陳列し、かつ図書を備えて公開したのである。その当時手島精一が館長としてその経営にあたり、文部省もその経費として、年々1万円の多額を支給したほどである。また手島館長は、しばしば欧米の博覧会に臨み、そこで最新の教育品を購入したのであって、そのためその後盛運に向かい、明治17、18年ごろに至って同館が飛躍的に増大したのである。
- ⑤ この頃は地方の学校のために、理化学器機などの購入方についての便をはかったり、博物標本について地方の学校のために利便をはかったりしていたのである。その後、明治22年7月に至って東京高等師範学校の管理となったが、ここでは普通教育に関係する物品だけを同校に引きつがせることとなり、旧聖堂の構内に一つの建物を新築して、これを陳列場にあてたのである。そして同時に当分、旧聖堂の左右の廊下を使用することになったのである。
- ⑥ この新築の建物が第1陳列場であり、後者が第2・第3陳列場であった。それで明治36年の陳列品は1万6千点余りに達したのであって、その中には海外諸国の教育品も多かったと思われる。
- ⑦ この教育博物館も大正3年6月には東京高等師範学校から再び文部省の直営するところとなったが、惜しいことに大正12年の大震災によって焼失し、そのまま現在に至っているのである。
- ⑧ 明治初年手島精一らの情熱によって作られ、相当な役割を演じた教育博物館が現在失われたままであるということは、日本の教育界にとってまことに嘆かわしいことであり、今後このような歴史をふりかえり、参考にすることによって、新しい理想的な形の教育博物館が国の力によって再び設立される日の近からんことを切望するしだいである……。
- ⑨ なお私がこのような教育博物館の必要性を痛感したことは、第1には十数年前欧米16か国を回って調査したときに切なる要求として私の魂に点火されたからである。調査してよく分かったことは、ヨーロッパ人は実によくヨーロッパの伝統を守り、これを理解し、伝統と向かいあい、その中に身を投じることによって、とりもなおさず自分というものを自覚するという生活態度を理屈

なしに身につけているということである。

- ⑩ 第2には私の年来の主張は、真の知識というものは、単に抽象的観念的に獲得されたものではなく、実物に直接膚でふれてみて体得したものでなければならないということである。近年“視聴覚教育”が盛んに唱えられているのであるが、私はそれにもう一つ“触”の教育を加え、実物に直接触れてみるという“視聴触覚教育”を理想とするものであり、能う限りこのような方法によって教育を行うべきであると信じているのである。そのために全国各地にできるだけ多くの教育博物館が設立されて、現場の教育に役立たせることを切望するものである。

上記の唐澤富太郎の文章において、第1に注目すべき点は、「明治初年手島精一らの情熱によって作られ、相当な役割を演じた教育博物館が現在失われたままである」と述べていることである。

ここで言う教育博物館については、現在、上野公園に存在している国立科学博物館の源流と見なす考えが一般的である。国立科学博物館それ自体も自館の歴史をそのように理解している。それにも関わらず唐澤はあえて、教育博物館は失われたままであると述べているのである。

第2に注目すべき点は、「真の知識というものは、単に抽象的観念的に獲得されたものではなく、実物に直接膚でふれてみて体得したものでなければならない」と指摘し、視聴覚教育のさらに上を行く形での「視聴触覚教育」を主張し、そのような教育を実現できる場所として教育博物館の設立に期待を寄せているという点である。

では、唐澤富太郎が理想として掲げた教育博物館とはどのような存在だったのであろうか。

この点について、椎名仙卓や金山喜昭の研究成果によれば、以下のような歴史が明らかにされている⁽⁹⁾。

まず、教育博物館は、明治9(1876)年3月22日に文部大輔田中不二磨が太政大臣三条実美に提出した上申書に始まった。この上申書には、「専門学科生徒実験拓智ノ用ニ供シ」とある。同年6月10日に現在の東京芸術大学構内に文部省直営の東京博物館建設された。

ところが、明治10(1877)年1月26日、田中不二磨が三条実美に「当省所轄東京博物館之儀ハ曾て具陳候通専ラ教育上要用ナル物品ノミ蒐備候儀ニ付今般教育博物館ト改称候」とあるような改称届けを提出し、東京博物館は教育博物館へと変わるのである。

学術博物館から教育博物館へ方針転換した理由については、明治9年4月に田中不二磨がアメリカ独立百年記念万国博覧会出席のために渡米した際にカナダのトロントで教育博物館を見て感銘を受けたことによるものという。この時、田中は程度の高い学術博物館よりも初等・中等教育に深い関わりを持つ教育博物館が必要であると痛感した。

こうして、明治10年4月13日、文部省学務課長で文部大書記官の九鬼隆一が全国府県の学務課に指示を出し、教育に関する物品を公私にかかわらず教育博物館に寄贈、寄託もしくは売却するように命じた。

この時に、全国から収集された物品は以下の通りである。

6

学事統計表

学校規則類

新築学校の絵図又は写真

教科書

椅子と机などの学校備品

教授上に用いる器械

生徒の描いた図面や試験答案

生徒の工作品など……。

次に教育博物館の展示方法についてであるが、これについては、教育用器具類と博物標本の二本立てとなっていた。

まず、一階では教育用器具類を展示し、二階は博物標本を展示していたのである。ちなみに一階に展示された教育用器具の内容は、家庭玩具類・幼稚園教授用具類・実物教授用標本類・数学用具類・学校模型類・物理器械類・化学器械類・星学器械類・地学用具類・書画学用具類・職工学校用具類及び生徒製品・盲啞及び痴子教授用具類・教場用及び生徒用諸器具類・卒業証書及び賞牌類・学校用卓子椅子類・比較解剖標品類・生徒製作品ならびに試業答書画類などに分けられ展示されていたという。

教育博物館の開館は、明治10年8月18日である。これは、第1回内国勸業博覧会開会の3日前にあたる。

教育博物館は教育に従事する者を第一の対象とし、理化学の実験器具などを単に展示するだけではなく、積極的に貸し出したり、模倣させたりした。剥製標本など重複するものは払い下げることもしている。さらに書籍室を設け図書の閲覧もできるようになっていた。

開館時間は祝祭日を除く午前10時から日没までとなっており、犬を連れてきたり、木履き草履での入館は厳禁。館内は禁煙であった。

初代館長は、東京帝国大学教授の矢田部良吉(植物学)で館長補佐は手島精一(工業教育)であった。国立科学博物館は、この教育博物館が開館した明治10年を創立年とする。

さて、唐澤が目にするこの手島精一は、教育博物館の運営を事実上、取り仕切った人物である。手島は、明治3(1870)年に渡米してイーストン大学に留学し、岩倉使節団が渡米した折には通訳としてアメリカ各地を視察した。明治7(1874)年帰国すると開成学校監事となり、翌年は同校製作学校教場事務取扱となり工業教育に関わった。

そして明治9年、米国独立百周年記念万国博覧会の折に文部大輔田中不二磨に同行した。この時に手島は、ダビット＝モルレーと共に、教育博物館で展示すべき資料を収集している。

さらに明治11年、パリ万国博覧会の際にも手島は文部大書記官九鬼隆一に同行しているが、この時もイギリス・フランス・ベルギー・ドイツ等を訪問し教育博物館の収集する資料について収集している。

手島がイギリスに出発する際に九鬼隆一に送った書簡(明治11年7月28日付)によれば、

教育博物館二蒐集セントスルノ物品ハ其目的ニ様アリ、一ハ公衆ノ来観ニ供シ、一ハ模造ノ参考ニ備ヘントスルモノタレバ其物品ハ務メテ現状ノ教育ニ適スルモノヲ撰ビ合ハセテ模造ノ用ニ供セントスルニ在リ

とある。ここから手島は教育博物館における資料収集の目的として

- ① 展示の活用資料のため。
- ② それを参考にして模造品を作り全国の学校に配布するため。

上記の2点を考えていたことがわかる。では具体的には、手島は海外に出張してどのような資料を収集したのか。その概要は、以下のとおりである。

幼稚教育ノ部……………幼稚ノ教育ニ用フル玩具、幼稚園用具。

指導教授ノ部……………算術用具、地理学用具、石盤、標本ナルヘキ単語速語図
指物教授ニ用フル植物動物或ハ金属標本

理学ノ部……………小学校所用器械、中学校師範学校所用理學器械、理学用掲図

化学ノ部……………上等小学校生徒ノ用フヘキ化学用具、中学校師範学校ノ用フヘキ化学用具、
中学校及師範学校教師ノ用フヘキ化学用具

動物学ノ部……………小中学校用動物標本、動物学掲図

植物学ノ部……………小中学校用植物学標本
地質ノ部……………小中学校用地質金石学標本、吹管試験用器
星学ノ部……………近易ナル星学用器械、星学用掲図
学校用家具ノ部……椅子卓子、学校用ストーブ、生徒用傘カケ
雑品……………聾啞盲者教育具、幻燈及附属
書籍ノ部……………教育家参考書、学校建築書、学校用記簿、年少男女二有益ナル書、聾啞盲、
廢孤院、改良院二関シタル書籍及用具、教科書、シーボルト氏著日本動物書、
画学標本、博物学参考書

以上、明治初年の教育博物館について、これまでの博物館学の研究を参照すると、それは、第1に初等中等教育に深く関わる博物館であったこと、第2に収集された資料は展示に利用されただけではなく、それを貸し出したり、資料の模造品を作成して全国の学校などに頒布することを目的としていたことなどが判明した。

教育博物館には博物標本なども存在したが、これもそれ自体を研究するというよりあくまでも教育の素材としての活用を目指したものである可能性が高い。

従って、唐澤自身が過去の事例として引き合いに出している教育博物館は、後に唐澤が建設した唐澤博物館とはやはり次元を異にするものであろう。

このように考えていけば、唐澤は、明治から大正にかけて存在した教育博物館を目標としながらも、更にその可能性を広げたものと評価できる。では、唐澤博物館のコレクションが我々に語りかけている可能性とは何か。次にこの点について考えてみたい。

IV 唐澤博物館の可能性

明治から大正にかけて存在した教育博物館を目標としながらも、更にその可能性を広げた。では、唐澤博物館のコレクションが我々に語りかけている可能性とは何か。

それは、唐澤博物館のコレクションが、単なる教育史研究の資料にとどまらず、日本人形成史研究の重要な資料になり得ることである。

唐澤前掲論文、「『教育博物館』の課題と意義」によれば、唐澤は道元の『典座教訓』に記されている「物心一如」を重視し、「物にはこころがある」と考えた。また、柳宗悦の『民と美』の影響も受け、「思想で物を語らず、物で思想を語る」べきだと述べている。

このような認識のもと、唐澤は物を通して、「日本人の心の原点」や「日本人の本来の心」を総合的に探ろうとした。唐澤にとって、資料とは、「それを作り、祈り、伝えてきた日本人の心を把握するため」のものであり、美術品ではなかった。ごく少数の名品ではなく、何でもないと思われている生活用具の中に意味を見出し、美を発見しようとしたのである。

このように書いていくと、民芸運動と同じ次元で理解される可能性はあるが、唐澤の研究の大前提となっているのは、「生活教育史」なのであり、日本人の形成は狭い意味での学校教育のみではなく、いまだ学校が存在していなかった古代から有形無形の多種多様なものによって生活を通して教えられ育てられてきたのだという教育観があった。

唐澤は「日本人形成の問題は学校教育中心ではとらえることはできず、生涯教育、生涯学習の観点に立脚しなければならない」とも述べている。このように学校教育だけではなく、社会教育や生涯学習をも射程に入れて広い視野で教育史の無限大の可能性を提起しているのが唐澤博物館であると言える。

おわりに

従来、教育史上、重要な意味を持ちながら教育学の分野からも博物館学の分野からもあまり注目されることのなかった唐澤博物館の存在意義について、検討を加えてきた。

結論としては、従来の教育博物館のように学校教育に偏重するものではなく、生活教育史を出発点として、さまざまな分野からのアプローチを可能とするコレクションが形成されていることが確認できた。博物館を舞台としたさまざまな形での教育の展開が期待される。

今後の課題としては、この貴重なコレクションを散逸させてはならず、できればこのまとまりを持って後世に伝えていくことが望ましい。その際に、この博物館の重要性を行政や博物館関係者が認識し、資料の保全のためにしかるべき支援を行う必要がある。

その支援の中には、資料一点一点の保存修復の他に、資料のデータベース化、公開、資料を用いた教育普及活動のプログラムの提案など、さまざまな内容が想定されるが、その第一歩としては所蔵品の完全な把握であろう。具体的には資料台帳の作成が必要となる。

これをどのような形で進めていくべきなのか、本学の学術助成研究で唐澤博物館を研究テーマに掲げて取り組んできた以上、今後とも考えていきたい。

註

- (1) 唐澤博物館十周年記念誌「愚徹」編集部『愚徹—唐澤富太郎 人、そして仕事』(唐澤博物館 2005年) pp.200~203。
- (2) 唐澤富太郎「実物による教育史研究—教育の生活文化史的考察—」『教育的真実の探求』(ぎょうせい 1975年) pp.267~278。
- (3) 唐澤富太郎「実物による研究を志して」『執念—私と教育資料の収集—』(講談社 1970年) pp.16~17。
- (4) 唐澤富太郎「『図説明治百年の児童史』(昭和四三年)」『教育的真実の探求』(前掲書 pp.280~289)。
- (5) 唐澤富太郎「『日本教育史』昭和二八年」『教育的真実の探求』(前掲書 pp.107~116)。
- (6) 唐澤富太郎「『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—』」『教育的真実の探求』(前掲書 pp.130~151)。
- (7) 唐澤富太郎『教育の流れの中で—人間教育の再考—』(ぎょうせい 1973年) pp.129。
- (8) 唐澤富太郎『教育博物館』解説(ぎょうせい 1977年) pp.3~9。
- (9) 椎名仙卓『日本博物館発達史』(雄山閣出版 1988年) pp.41~106、同『明治博物館事始め』(思文閣出版 1989年) pp.154~160、同『図解博物館史』(雄山閣出版 1993年) pp.70~77。金山喜昭『日本の博物館史』(慶友社 2001年) pp.83~90。

附記

小稿は、平成28年度本学学術研究助成「教育学・博物館学からのアプローチによる唐澤博物館成立過程の研究」の成果の一部である。本研究を遂行するにあたっては、唐澤博物館の館長である唐澤るり子氏の全面的なご支援を賜った。また、法政大学キャリアデザイン学部教授金山喜昭先生にも有益なご教示をいただいた。本研究は、土井進教授との共同研究であることを明記する。